

第3節 第Ⅲ群1・2類土器の型式学的検討

—熊久保式土器の構成と変遷—

小口 英一郎

はじめに

熊久保遺跡から出土した中期後葉土器群は、事実記載によって指摘したように地文の違いにより大きく4群に分類された諸型式から構成されている。その構成は、1類：棒状工具による沈線描出、2・3類：櫛歯状工具による描出、4類：縄文施文、として分け2類については大きく1類の中の変異として捉えている。1・2類がいわゆる「唐草文土器」、3類が曽利式、4類が加曽利E式に比定される。

当該型式に関する研究動向は、型式の生成過程と系統の再検討を行う研究（田中1984、三上1986、水沢1996、小口1998）や、型式の構成と変遷を提示する論考（百瀬1986、三上2002）、さらに型式名称に関するもの（小口1998、神村1999、三上2002）などがそれぞれ展開されている。また、近年における北信・東信地域における大規模発掘の成果により当該期土器群の地域色や新型式の設定など提唱がなされている（綿田1983・1988、川崎2001）。

かつて筆者は、いわゆる「唐草文系土器」と呼称される土器群の系統について再吟味を行い、在地型式の型式構成要素の継承と断絶、水沢教子氏が検討を行った越後地域における型式構成要素の伝播・変容の存在を追認し、中信地域から南信北半地域における土器群について森嶋稔氏の提唱を受けて仮称「熊久保式」の提唱を行った（小口1998）。本論では、その検討をもとに、今回最もまとまりを有して出土した第Ⅲ群1・2類土器についての段階設定を行い、その上で中期後葉における本遺跡の編年案を提示したい。また、一括資料が得られなかった後半段階については、松本平の他遺跡の資料を援用しながら若干の検討を行うことにし

たい。

1 第Ⅲ群1・2類土器の器種構成

1・2類土器の器種は大きく、（1）深鉢、（2）浅鉢、（3）吊手土器、（4）鉢形土器、に分かれ、さらに深鉢は3つの器形に細分される。

深鉢 a 頸部が括れ、口縁部が直立するか、やや内湾し、さらに胴部が張るいわゆるキャリパー形を呈する。口縁部には2対（4単位）の把手を有するものがある。文様帯は口縁部のⅠ文様帯、頸部のⅡ a 文様帯、体部のⅡ文様帯に分かれる。Ⅱ a 文様帯は無文と有文の二者が存在する。

深鉢 b 頸部がやや括れ、口縁部が外反し、さらに胴部が張る器形。口縁部から頸部にかけて1対（2単位）の把手を有するものが認められる。文様帯は口縁部が無文帯を形成し、頸部のⅡ a 文様帯、体部のⅡ文様帯から構成される。

深鉢 c 無頸タル形の器形を呈する。胴上半が大きく張り、口縁部が内湾するものと、時期が下るにつれ口縁が直立的となり胴部も直線的になる。口縁部には1対（2単位）の把手を有するものが認められる。文様帯は口縁部のⅠ文様帯と頸部のⅡ a 文様帯、体部のⅡ文様帯とⅡ a 文様帯が省略されるものに分かれる。

浅鉢 口縁部が内折し、文様帯を形成するものと口縁部が肥厚するものが存在する。平縁と波状縁がみられる。

吊手土器 鉢部から一対の把手が立ち上がる把手式と、アーチ状の橋を渡した二窓式に分かれる（綿田1999）。

その他、今回の調査では検出されなかったが、鉢形土器、両耳鉢、台付深鉢などが1類土器の器

種として確認できる。そのなかで頸部に一對の把手が付く両耳鉢は、口縁部が無文で頸部に文様帯を有するものと、体部と頸部が一体となって文様帯を形成するものに分かれる。松本市一ツ家遺跡64・87号住、屋外埋甕5などを挙げることができよう。台付深鉢は巻頭図版にあるように、深鉢b類に口縁部から胴上半にかけて把手が1対付く腕骨文土器であり、脚部には円形の透し孔が施されている。

2 第Ⅲ群土器の構成と変遷

(1) 先行型式の再検討

会田進・宮坂光昭氏による梨久保3・4号住の良好な一括資料によって「梨久保B式」の設定が

なされ(会田・宮坂1972)、その後資料の増加に伴い器種構成に関する型式学的検討が行われている(三上1994・戸田1995・神村1996)。この標識資料の中には2点の櫛形文土器と、1点の口縁部に沈線褶曲文を有し、腕骨文モチーフの萌芽の様相がみられる土器が提示されている。前者の櫛形文土器の位置付けについては、古相を帯びるとして従来の井戸尻Ⅲ式と標識資料の間に一段階設定する必要性を指摘する見解(戸田1995)と花上寺遺跡25号住でみられるように隆線褶曲文と櫛形文が融合したものが梨久保B式の組成のなかに加わるという指摘(三上1994・2002)がある⁽¹⁾。

一方、後者については梨久保B式と次段階のいわゆる唐草文土器との間隙を埋める資料として重

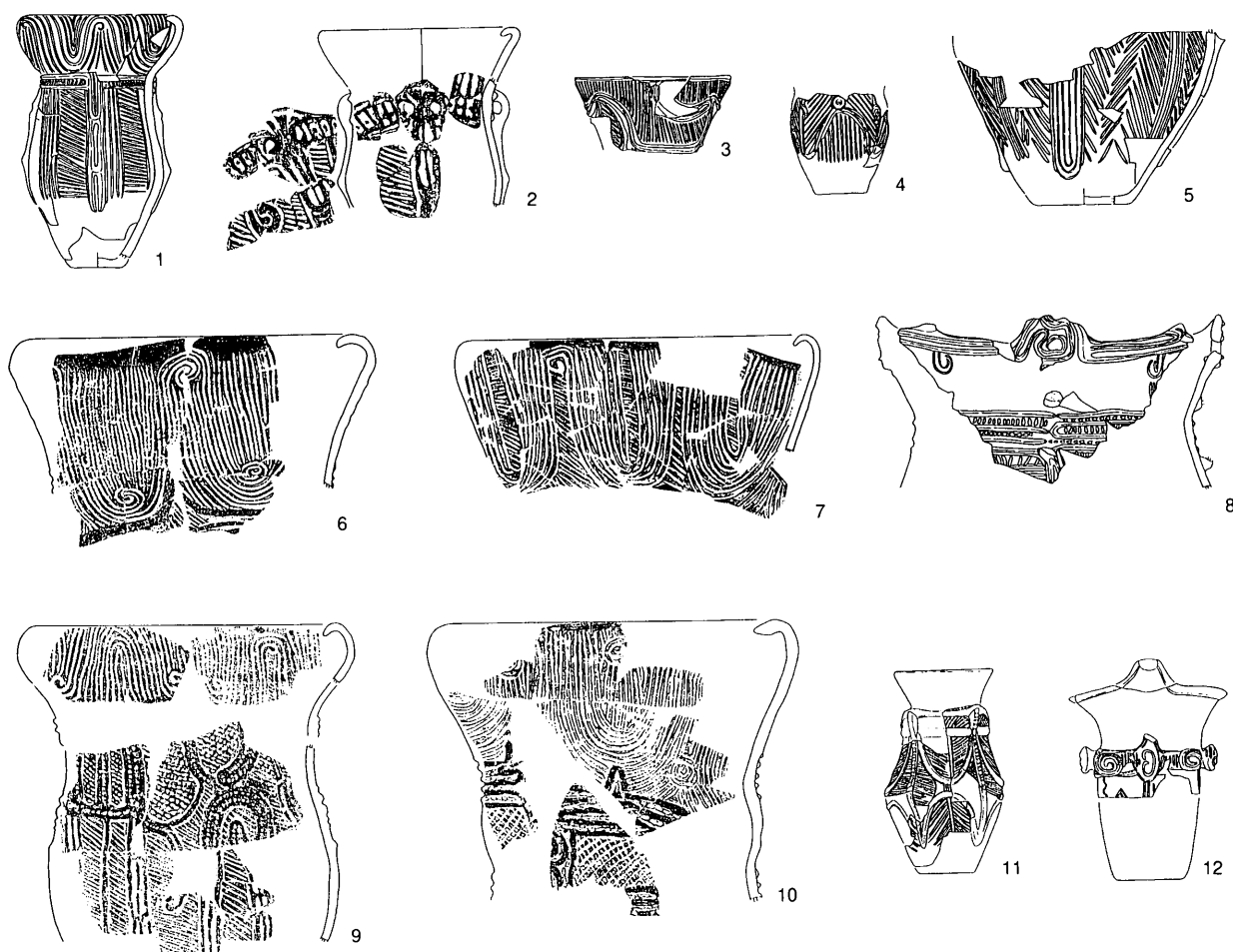


図1 第6・10号住出土土器(1～8:6号住、9～12:10号住 S=1/8)

要である。今回の調査によって建替え前の6号住と10号住から両者を繋ぐと考えられる資料が出土している(図1)。その特色は口縁部が大きく内湾し、頸部で括れ胴が張るキャリパー形を呈し、口縁部装飾に沈線褶曲文を描く一群が主要器種となることである。そのほか、条線地文の異方向化、半截竹管工具から棒状工具への比重増加、さらに構成器種の不安定化などの大きな変化がみられる。この沈線褶曲文土器については、松本市塩辛遺跡22・24号住、弥生前遺跡20号住、山影遺跡73ピット、南中島遺跡17号住、前田木下遺跡14号住、塩尻市上木戸遺跡110号住などで確認できる。いわゆる腕骨文土器と呼ばれる越後系土器をほとんど共伴していないことが熊久保6・10号住資料の特色であり、本資料群を指標として梨久保3・4号住の後続段階として新たに設定したい。これらの資料を梨久保B式の範疇で捉えるべきか、熊久保式の最初頭に位置付けるべきか問題が残るが、口縁部文様の特色と胴部文様の変化をどのように評価するかによって見解が別れよう⁽²⁾。

(2) 第Ⅲ群土器の構成と変遷(図2～4)

先述したように地文の違いから、第Ⅲ群土器を1～4類に分けている。ここでは、他型式である3・4類土器を含めた変遷案を提示したい

第Ⅰ段階：3・11・16・19・31号住が該当する。器種構成がバラエティーに富み、また沈線文系と櫛歯条線文系(15～19・21・23・43～45)の系統に分かれる。本段階は、深鉢a・b類がc類よりも比重を占める特徴を有している。その背景は、深鉢b類に代表される前型式の器種の継承と新たに13・14の越後系土器(腕骨文土器)が加わり、さらに17にみられるようなⅠ文様帯とⅡ文様帯に別れ、口縁部に渦巻文区画を有する加曽利E式の影響による器種が生成することにあると考えられる。さらに、口縁部が内折して沈線渦巻文が描かれる46と無文で平縁の47、さらに口縁部を肥厚させる48の3種の浅鉢が存在している。この48の肥厚口縁部の特徴は条線文系の43と類縁的である。

文様要素は、胴部文様には腕骨文モチーフ(13・14・22・23・38)や蛇行懸垂文(15～18)、剣先文(24)が多用される。また、タル形器形を特徴とする深鉢c類(28・29・31・42・45)は本段階で生成するが、文様帯構成はⅠ・Ⅱ文様帯であり、Ⅱa文様帯はみられない。

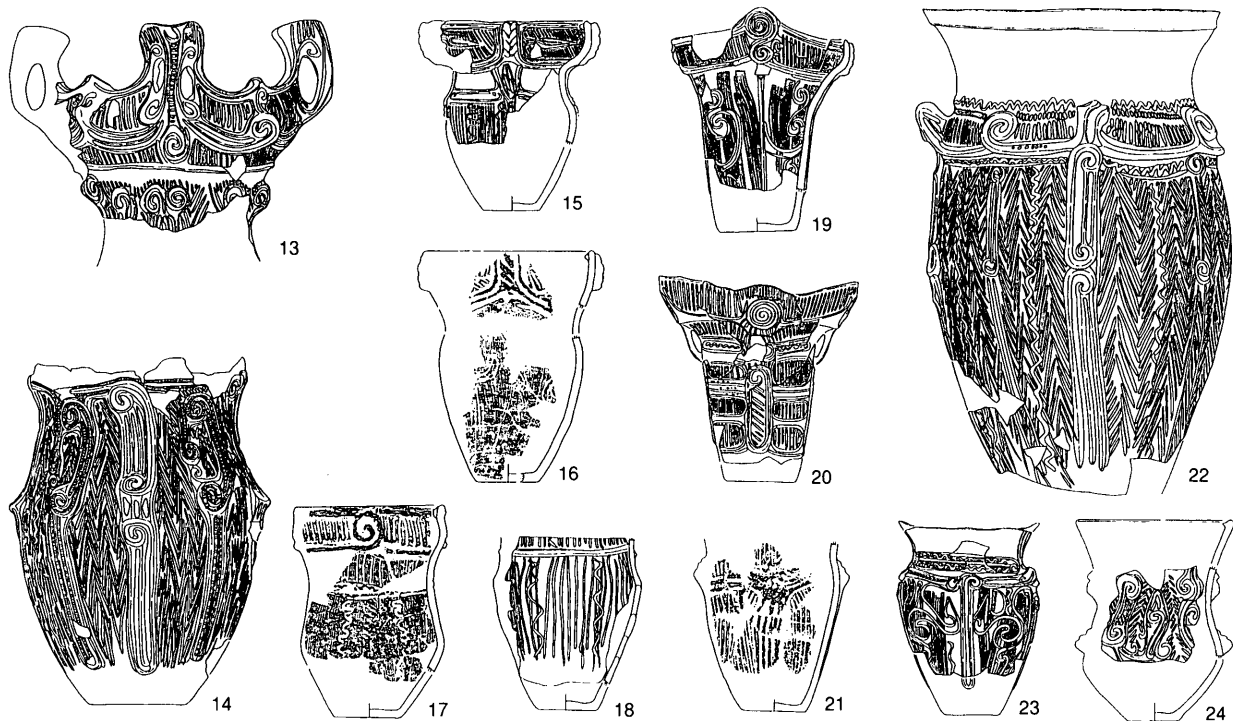
第Ⅱ段階：7・8・13・15・17・19・20・21・22号住が該当する。

深鉢a類(25・26)が減少し、深鉢b類は本遺跡ではみられない。深鉢b類の口縁部無文帯が縮小し、c類のタル形器形に収斂されていくものと思われる。その類例として第Ⅰ段階に相当する松本市一ツ家遺跡87号住、102号住埋甕などを挙げることができよう。

本段階の指標として、いずれも器種も大柄渦巻文が胴部に展開し、また深鉢c類においてⅡa文様帯が形成されることであろう。35～37、50～52は楕円もしくは方形区画文を有し、内部に交互刺突による波状文が充填されている。本文様帯の発生は明確ではないが、第Ⅱ段階に帰属する22の頸部にみられる渦巻つなぎ弧文による区画化と関連があるかもしれない。この渦巻文と15・16の口縁部区画の撚り縄状文が置換して、形成されたところでは考えたい。胴部の渦巻文は左右が対になる35や腕骨文を基点として渦巻文が派生する36の大きく二者に分かれる。

その他の器種として、波状口縁を呈し、口縁部が緩やかに外反する器形が新たに登場する(27～29・31・32)。波頂下に渦巻文を配し、その間に渦巻文や蛇行沈線が描出される。煮炊きの用土器ではないが、ランプとしての吊手土器も本段階で確認される(55・56)。一方で、浅鉢がみられず、代わって曾利Ⅲ式の両耳鉢(62)や鉢形土器(61)が流入しているようである。この61は59とともに肥厚帯口縁部(山形1989)を有し、太沈線によるS字状文や円形文などが描かれることを特色としている。また、曾利式と加曽利E式の折衷タイプとしての57や60も認められ、曾利式が多く組成と

第
I
段
階



第
II
段
階

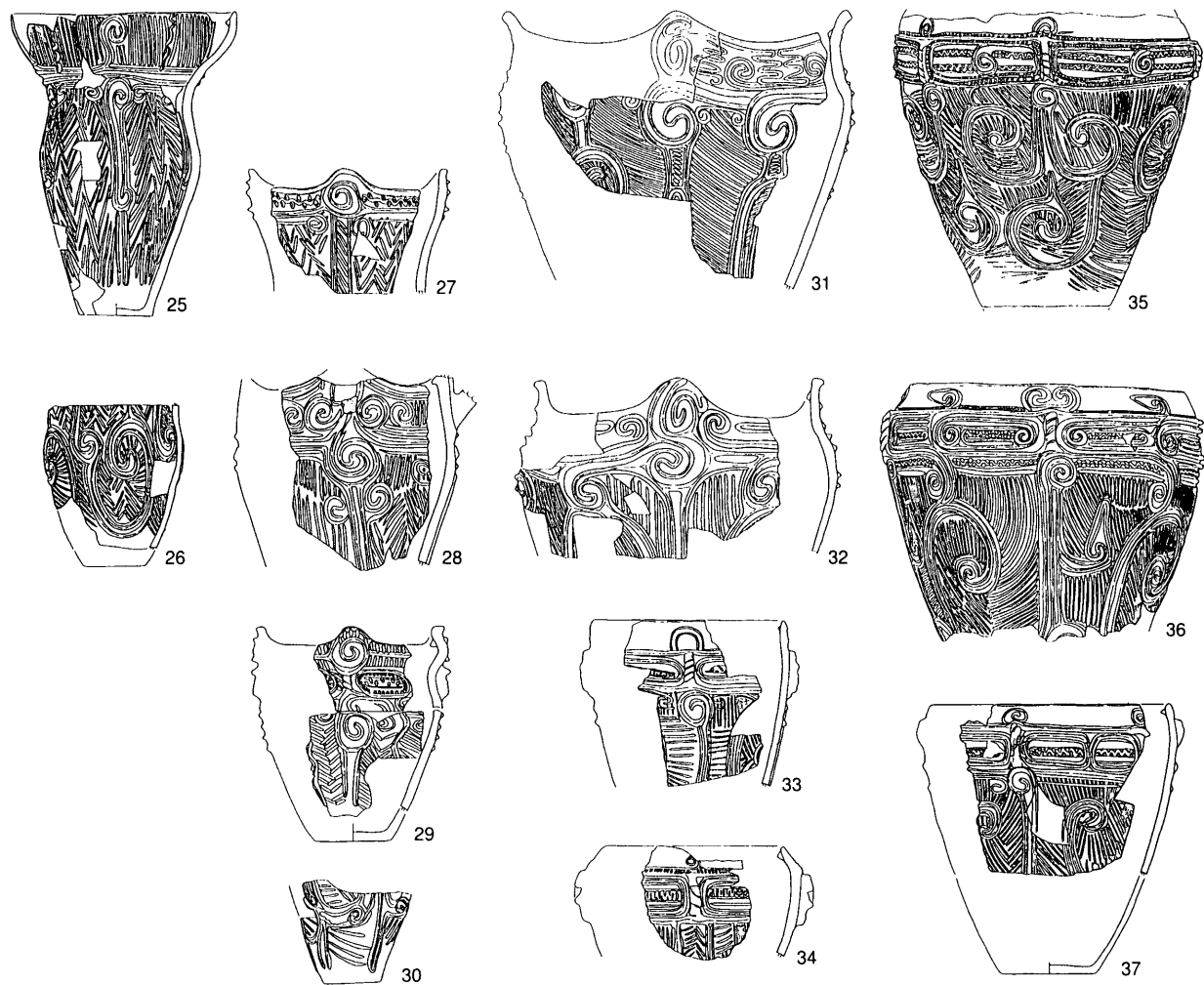


図2 第Ⅲ群土器の構成と変遷〈その1〉(S=1/8)

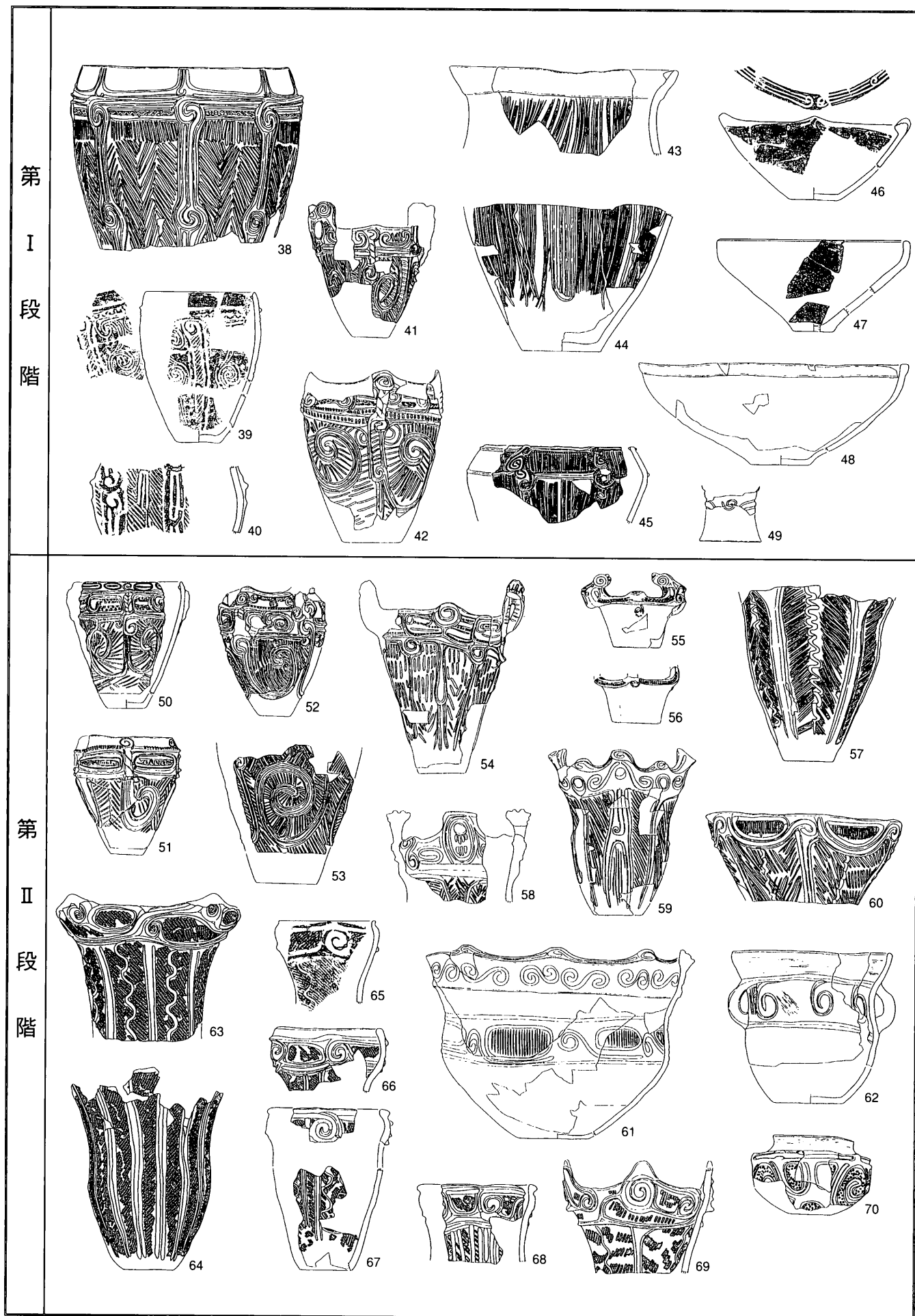


図3 第Ⅲ群土器の構成と変遷〈その2〉(S=1/8)

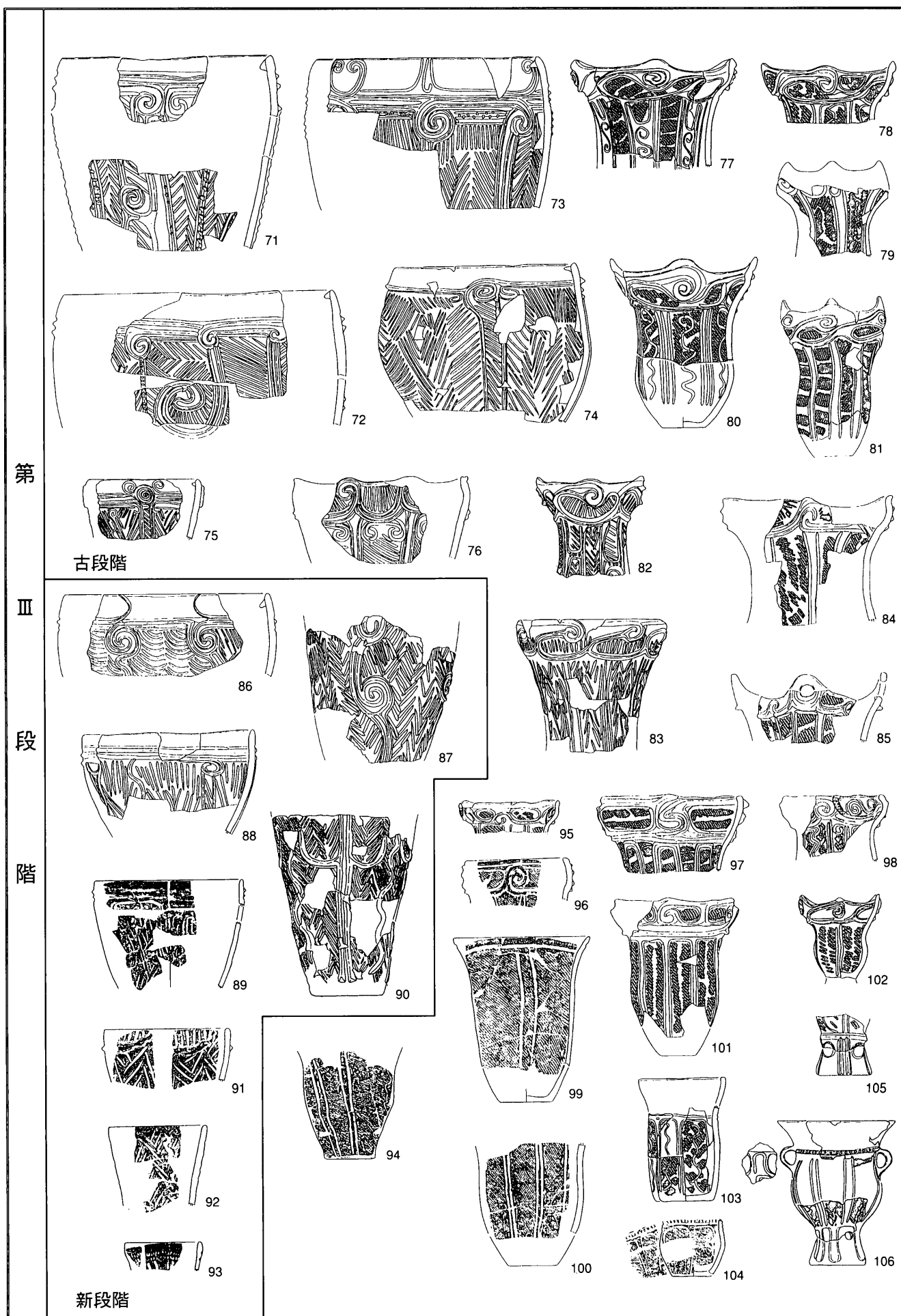


図4 第Ⅲ群土器の構成と変遷〈その3〉(S=1/8)

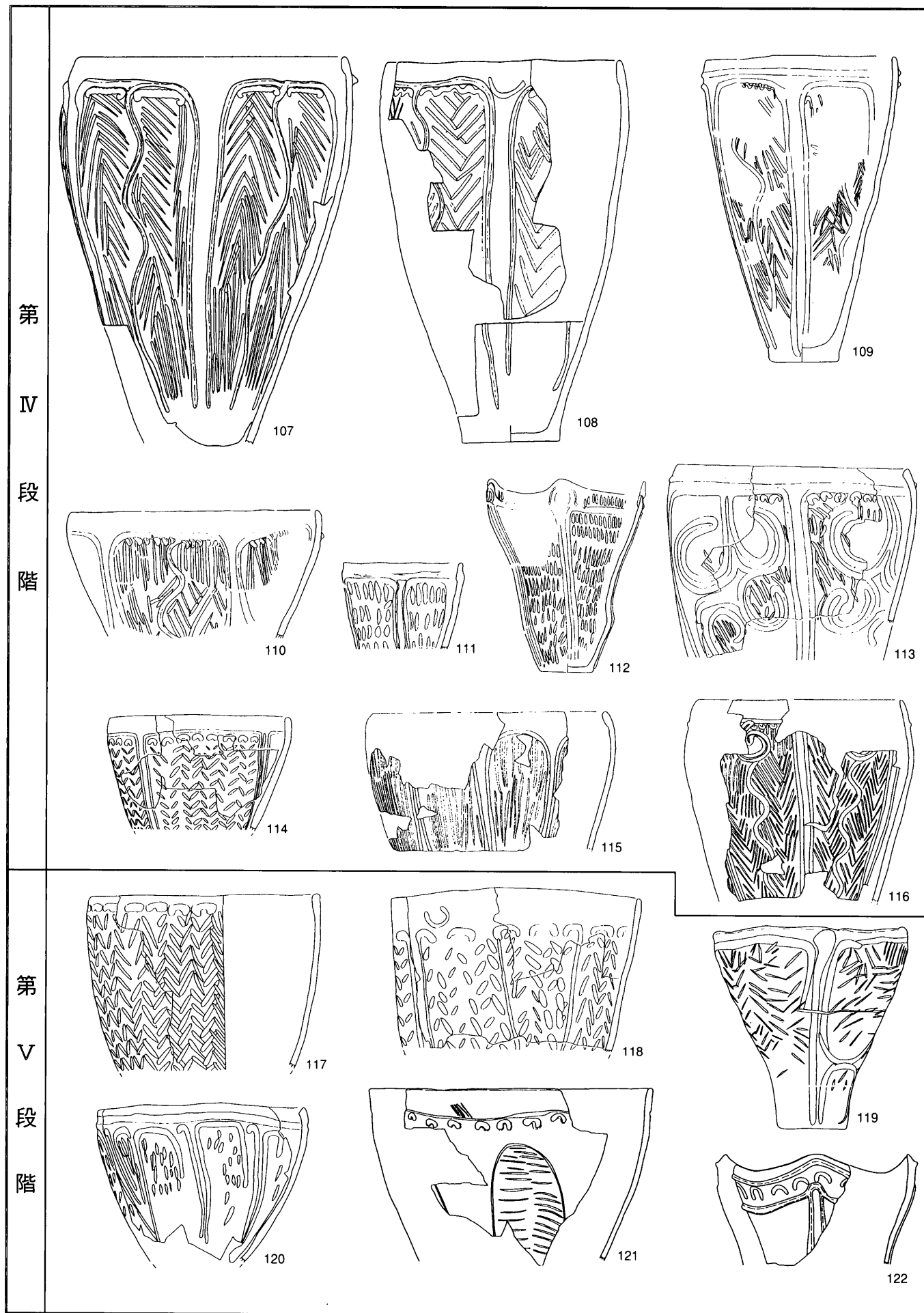


図5 松本盆地における第Ⅳ・Ⅴ段階の土器 (S=1/8)

して加わる点が注目される。

第Ⅲ段階：1・5・12号住が該当する。

本段階は深鉢c類と加曽利E3式との折衷型土器(82・83)、さらに深鉢a・b類を補うようにキャリパー形の加曽利E3式も組成として大きな位置を占めるようになる。71～75はⅡa文様帯が消失し、小渦巻文が口縁部無文帯を画する隆線と接続して垂下している。とくに71・72は刻みの入った隆線が垂下していることが特色であり、伊那谷では本類型はあまり認められない。

86～93は渦巻文が一段と退化し、蛇行懸垂文がモチーフの主流となってくる。このなかで、86は地文が鱗状に描かれることから佐久地方の一群と関連があるかもしれない。地文の沈線はラフになっていくが、依然「ハ」の字状を意識して描かれている。第Ⅲ段階でも新相を帯びる。

77～81、84・85、95～106は地文に縄文を有して

いる加曽利E3式である。口縁部文様帯には平縁と波状口縁の二者が存在し、また口縁部が無文帯を形成する99・103・106などもみられる。また、105・106のように台付土器も器種として加わる。

胴部は2～3本の沈線が垂下し、沈線間が幅広く、ナデ・ミガキ調整がなされるものと、99のようにそうでないものが存在する。97や101のように、この垂下沈線が区画化され、逆U字状として変化していく過程は、沈線文系の一群と連動している。また、77のような沈線間のS字文などは、当該地域の地域色であろう。

さらに在地の沈線文系と縄文系の加曽利E式の折衷タイプとして82・83があり、地文が置換していることが特色である。

第Ⅳ段階 (図5、107～116)

今次の調査では、本段階の一括資料に恵まれなかった。本段階の器種構成は深鉢c類が残存する

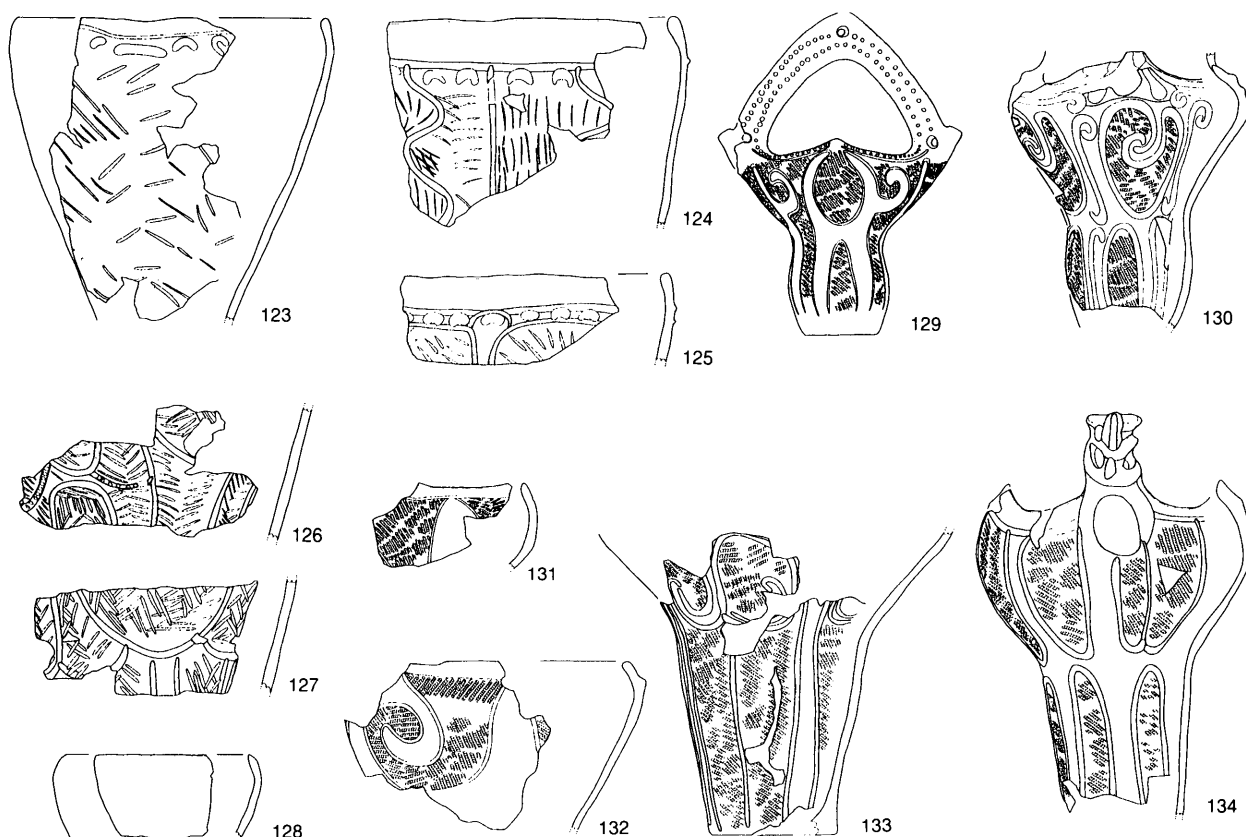


図6 山形村三夜塚遺跡 SK099出土土器 (S=1/8)

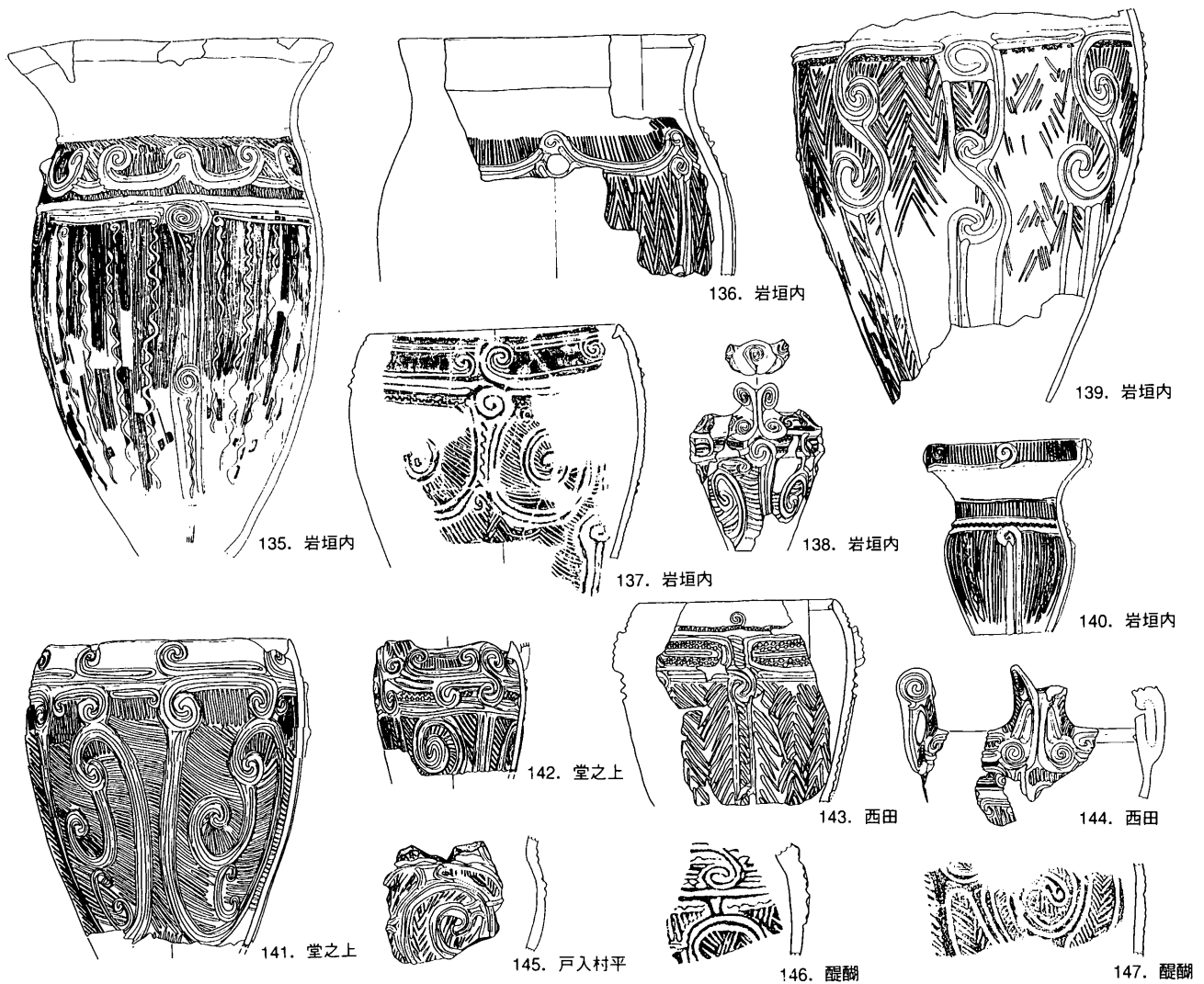


図7 県外出土第Ⅲ群1・2類土器 (135~144: S=1/8 145~147: S=1/6)

が、胴部の張りがなくなり直線的になることを特徴とする。また深鉢a・b類はみられず、その器種を補うかのように加曽利E4式古段階が組成として加わる。文様帯構成としてⅡa文様帯が消失し、逆U字状区画文が隆線によって描かれ、区画内に蛇行隆線、崩れた渦巻文などのモチーフとラフな斜沈線・直線状沈線が地文として充填される。本段階を松本盆地の他遺跡の資料によって補うならば、松本市坪ノ内遺跡18号住(107・108)塩尻市上木戸遺跡17号住(109~112)、明科町北村遺跡SQ503(113)、SH686(114)、三夜塚遺跡E区遺構外(115)・SK126(116)などが基準資料となる。

第Ⅴ段階(図5・6、117~134)

本段階は沈線文系が僅かながら残るものの、型式構成はむしろ加曽利E4式新段階が主体となる。

深鉢c類では口縁部と体部を分ける区画線が消失したものや(117)、逆U字状区画文がほぼ消失し、加曽利E4式の区画文様内に地文沈線が充填されたり(121・122)、勾玉状列点文とラフな斜沈線や直線状短沈線、ワラビ手文などが描かれる。この勾玉状列点文は、交互刺突による波状文が簡略化された文様である。熊久保遺跡と同じ西山山麓に位置する山形村三夜塚遺跡SK099から一括資料が得られている(図6)。124~127は前段階の混入と考えられるが、縄文系の加曽利E4式のセッ

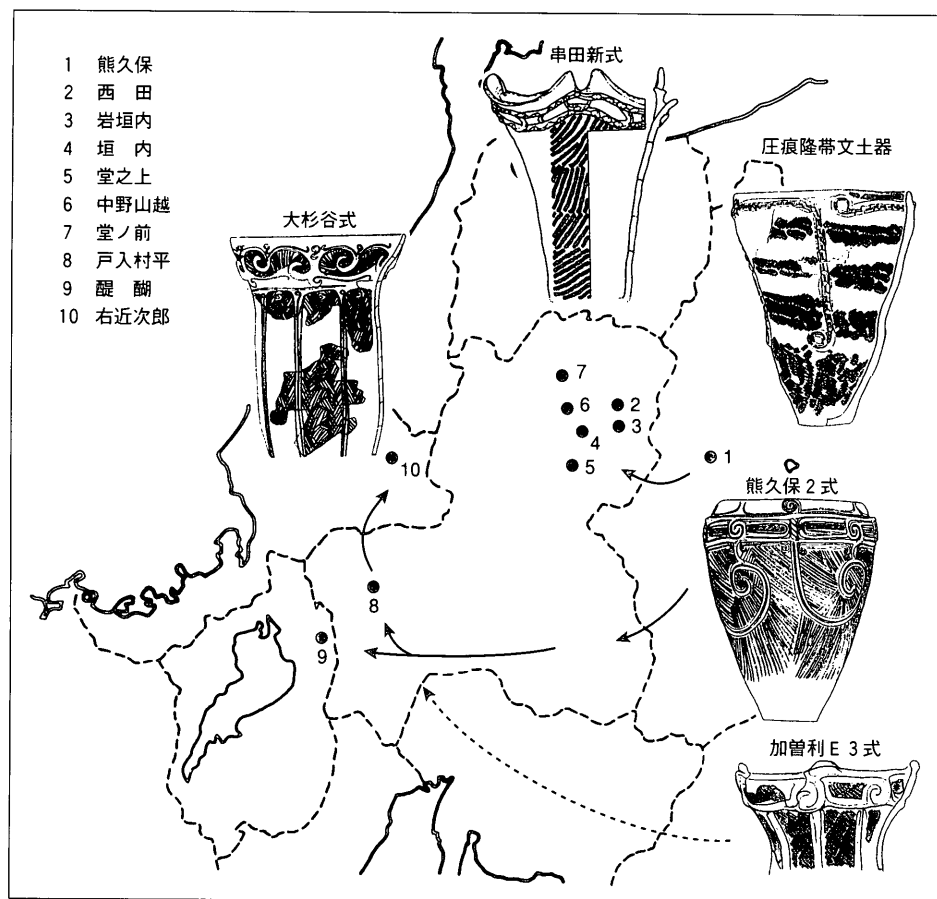


図8 熊久保式の西方伝播と併行型式群の分布概念図

136・140) など本段階の資料は散見される。

第Ⅱ段階：最も分布範囲を拡大する時期である(図8)。第Ⅰ段階の分布範囲に加え、佐久地方や長野盆地の南部、さらに下伊那地方、美濃地方にも拡がりを有する。飛騨地方では岩垣内遺跡遺構外(137・138)、牛垣内遺跡7・8号住、西田遺跡SX17(143・144)、久々野町堂之上遺跡14号住(141・142)、美濃地方西端の戸入村平遺跡4号

ト関係をここでは重視したい。そのほか、北村遺跡SB560(117・119)・SB580(120)、SQ501(118)、一ツ家遺跡土坑1425(121・122)などを列挙しておきたい(図5、117～122)。

以上、熊久保遺跡出土資料によって第Ⅰ～Ⅲ段階、第Ⅳ・Ⅴ段階を松本盆地の他遺跡資料により補足して中期後葉期における編年案を試みた。これらのなかで、沈線・櫛歯条線地文の1・2類土器を「熊久保式」と認定し、次に各段階の分布とその拡がりを概観したい。

3 熊久保式土器の分布と動態(図8)

第Ⅰ段階：熊久保式の成立段階では、松本盆地・諏訪盆地、さらに上伊那を中心として拡がりをみせる。また、下伊那では、いわゆる下伊那タイプと呼ばれる東海地方の咲畑式と融合して生成される独自の器種が生成されていく。また、飛騨地方においても丹生川村岩垣内遺跡SB6・10・17(135・

住(145)、さらに滋賀県浅井町醍醐遺跡(146・147)にまで及んでいる。とくに興味深いのは醍醐遺跡出土資料であり、胎土の色調や文様構成から146は中信地方、147は南信地方に分布する1類土器であり、それぞれの地域から搬出された可能性がある。一方で、関東地方や山梨県の甲府盆地といった東方には間接的な影響を認め得るが、型式そのものは散見されるのみである(櫛原1986)。

第Ⅲ～第Ⅴ段階：分布範囲が縮小し、松本盆地、諏訪盆地、上伊那地方が中心となり、下伊那地方に部分的に散見される。当該期は、加曾利E3～4式の分布範囲が拡大する時期であり、その折衷タイプも多く生成される。また、曾利Ⅲ～Ⅳ式も本地域で確認される。飛騨地方では岩垣内遺跡SB39(139)が第Ⅲ段階として該当しよう。

おわりに

熊久保式の構成と変遷について、今回の出土資

料および周辺遺跡の資料をもとにして若干の検討を行った。変遷案については、これまでの先学の研究と大きく異なった点はないが、近年資料が増加している飛騨・美濃地方の様相について分布域の動態と関連させて概観した。また 6・10号住を

独立した段階として設定し、私見を述べさせていただいた。とくに伊那谷などを含めた全体の詳細な検討が行えず、片手落ちの感を否めないが、後日機会を改め検討を行いと思っている。

註

- 1 いわゆる櫛形文土器の位置付けについては、後日改めて見解を述べたいと考えている。
- 2 沈線褶曲文土器は、器形と口縁部文様は梨久保B式の要素を色濃く残している。一方、胴部のモチーフについては、2～3本の隆線によってU字状文や十字文などが展開し、地文はそのモチーフ間を充填するように斜沈線が施文される。また、6・10号住にみられるように刺突文を地文として施すものもみられ、文様要素の漸移の様相を読み解くことができる。

引用・参考文献

- 会田進・宮坂光昭 1972 『梨久保遺跡―長野県岡谷市梨久保遺跡第三・四次発掘調査報告―』岡谷市教育委員会
- 青沼博之・百瀬忠幸 1987 『殿村遺跡』山形村教育委員会
- 上嶋善治ほか 1997 『丹生川ダム水没地区（五味原遺跡群）埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 西田遺跡』(岐阜県文化財保護センター)
- 上嶋善治ほか 1998 『丹生川ダム水没地区（五味原遺跡群）埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 牛垣内遺跡』(岐阜県文化財保護センター)
- 上原真昭ほか 2000 『岩垣内遺跡』(岐阜県文化財保護センター)
- 小口英一郎 1998 「唐草文土器」の再検討―「熊久保式」の提唱と成立段階の検討を中心に―『信濃』50―7 信濃史学会
- 小口達志 1995 『床尾中央遺跡』塩尻市教育委員会
- 神村 透 1996 「波状口縁櫛形文土器を追う」『長野県の考古学 (岐阜県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ)』(岐阜県埋蔵文化財センター)
- 1999 「私の姓は唐草文、名は無し」『長野県考古学会誌』90 長野県考古学会
- 2000 「平出遺跡口号住居址出土土器から一条線地文沈線唐草文土器―」『平出博物館紀要』17 塩尻市立平出博物館
- 狩野 睦 1988 「串田新・大杉谷式土器様式」『縄文土器大観』3 小学館
- 川崎 保 2001 『県単農道整備事業（ふるさと）大野田地区埋蔵文化財発掘調査報告書―浅科村―駒込遺跡』(岐阜県埋蔵文化財センター)
- 榎原功一 1986 「大泉村姥神遺跡出土の唐草文土器について」『丘陵』12 甲斐丘陵考古学研究会
- 工藤俊樹 1985 『右近次郎遺跡Ⅱ』大野市教育委員会
- 瀬口眞司・小島孝修・可児直典 1998 『醍醐遺跡』滋賀県東浅井郡浅井町
- 田中 彰 1992 「垣内遺跡にみる飛騨の縄文集落」『特別展 飛騨のあけぼの』岐阜県博物館友の会
- 十日町市教育委員会 1998 『笹山遺跡発掘調査報告書』
- 戸田哲也 1993 『中野山越遺跡発掘調査報告書』岐阜県吉城郡古川町教育委員会
- 1995 「中野山越A 2 類土器論」『先史考古学研究』5 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 1998 『堂之上遺跡―縄文時代集落跡の調査記録―』岐阜県大野郡久々野町教育委員会
- 林 直樹 1996 『堂ノ前遺跡発掘調査報告書』岐阜県宮川村教育委員会
- 平林 彰 1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11―明科町―北村遺跡』(岐阜県埋蔵文化財センター・長野県教育委員会)

- 平出遺跡調査会編 1955 『平出－長野県宗賀村古代集落遺跡の総合研究－』朝日新聞社
- 松本市教育委員会 1990 『松本市弥生前遺跡』
- 1991 『松本市南中島遺跡』
- 1993 『松本市塩辛遺跡Ⅱ・Ⅲ・矢作遺跡・松陰寺遺跡』『松本市山影遺跡』
- 1998 『松本市小池・一ツ家遺跡』
- 三上徹也 1986 「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」『長野県考古学会誌』51 長野県考古学会
- 1987 「梨久保式土器再考」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1
- 1996 「花上寺遺跡における縄文時代中期後半の土器様相－特に梨久保B式土器の組成に関する考察を中心として－」『花上寺遺跡－中部山岳地の縄文・平安時代集落址－』岡谷市教育委員会
- 2002 「所謂「唐草文土器」の構造・変遷と型式名に関する考察」『長野県考古学会誌』98 長野県考古学会
- 水沢教子 1996 「大木8b式の変容（上）」『長野県の考古学（助長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ）』助長野県埋蔵文化財センター
- 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書24-更埴市内その3-更埴条里遺跡・屋代遺跡群－縄文時代編－』助長野県埋蔵文化財センター
- 武藤貞昭ほか 1994 『徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 戸入村平遺跡』助岐阜県文化財保護センター
- 山形真理子 1989 「曾利式土器の研究（下）」『東京大学考古学研究室紀要』15
- 米田明訓 1980 「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年－所謂「唐草文土器」を中心として－」『甲斐考古』17－1 山梨県考古学会
- 綿田弘実 1983 「北信地方における縄文中期後葉より後期初頭の土着土器」『須高』17 須高郷土史研究会
- 1988 「北信濃における縄文中期後葉土器群の概観」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2
- 1999 「Ⅲ 長野県の釣手土器」『縄文土器のふしぎな世界 第二章－中部高地の釣手土器展－展示図録』諏訪市博物館
- 和田和哉 1997 『淀の内遺跡』長野県山形村教育委員会
- 2001 『淀の内遺跡Ⅳ』長野県山形村教育委員会
- 2002 『三夜塚遺跡Ⅲ』長野県山形村教育委員会